

大倉工業株式会社 2021年12月期決算説明会 質疑応答

Q1. 合成樹脂価格が高騰していますが2021年、2022年業績への影響をそれぞれ教えてください。

A. 2021年計画では国産ナフサ価格を45,000~48,000円/kgと想定していました。業績影響について1Q、2Qは国産ナフサ価格の低位安定によるプラス影響があり、3Q後半からマイナスの影響に変わりました。4Qでは国産ナフサ価格が55,000円/kgを超えさらにマイナス影響を受けましたが、年間を通してはほぼ想定通りで若干の減益要因となりました。

2022年業績は足元の状況から国産ナフサ価格を70,000円/kgと想定しますと年間で16~17億円のマイナス影響があります。合成樹脂事業セグメントでは製品価格改定、販売数量増、コスト削減に取り組み営業利益予想を40億円と見込んでいます。

Q2. 中期経営計画で伸ばす製品とした環境貢献製品、光学用アクリルフィルムの見通しについて教えてください。

A. 2021年の生活サポート関連製品に占める環境貢献製品の割合は35%程度となっています。現時点で40%を超えるまでの計画はできており、資源循環プロジェクトで取り組みリサイクル原料、リサイクル製品の販売により上乗せし、2024年での50%達成を目指します。利益面では現在の原材料価格の水準からリサイクル原料に現状の製品を置き換えた場合、5%前後改善すると見込んでいます。

偏光板保護用広幅アクリルフィルムはLCDパネルの大画面化が進み65インチ以上のパネル、偏光板の増産に応じて需要も高まっていくと見込んでいます。偏光板メーカーは2,500mm幅対応ライン増設を計画しており2024年にはアクリルフィルムの需要と供給のバランスが変わりタイトになると想定しています。そこに向けた広幅化の投資を行っていく計画で生産能力は2021年に実施した投資により2022年は1.5倍になり、さらに今回の投資で2022年の2倍になります。

Q3. 今後の株主還元について将来的に必要と考えている現金同等物の水準と併せて教えてください。

A. 株主還元は経営上の最優先課題の一つと位置づけています。継続的な安定配当を基本に、業績や財務健全性のバランス等も総合的に勘案しつつ、配当水準の引き上げに努めます。現金同等物の水準は中長期計画での投資を勘案すると現状の水準が基本と考えています。

Q4. 従来は「丸亀から世界へ」というイメージでしたがNext10(2030)、中期経営計画(2024)では海外展開の話がでています。具体的には、どのような製品、時間軸で考えていますか。

A. 合成樹脂事業セグメントでは、すでに一部海外生産拠点を生産していますが、新規材料事業セグメントでは、世界で競争優位をとれる製品を国内で作るというスタンスで考えていました。しかし自動車業界は地産地消の傾向が強く、自動車関連フィルム、モーター関連の接着剤について、現地で事業を行っている企業と協業して2024年からの海外生産を計画しています。

Q5. 新規材料事業セグメントの2021年、2022年の需要動向、業績について教えてください。

A. 2021年は年間を通して需要は堅調でした。特に光学材料BUは1年間フル稼働の状態でした。電子材料BUのスマートフォン向けの中小型サイズ用は弱い局面もありましたがほぼ想定内で推移しました。2021年3Q、4Qはプラス側で推移しました。4Qの利益については若干落ちてはいますが、需要動向は変わっていません。これは2022年期初からのフル稼働を目的に2021年末の生産を早めに停止して機械メンテナンスを行ったことが影響しています。

2022年のスマートフォン向け中小型サイズ用の需要は足元では落ちています。しかしテレビ向け大型サイズ用の需要は引き続き堅調で今後についても堅調に推移するとみています。

新規材料セグメントの2022年売上高予想は130億円ですが、2022年から「収益認識に関する会計基準」を適用する影響で、2021年実績に当基準を適用した場合118億円となるので売上も着実に伸ばしていく計画です。

Q6. 中小型サイズ用の見通しが弱いのは、市場の需給要因ですかシェアダウンの影響ですか。

A. 中小型サイズ用の総需要は2022年もマイナスになるとは想定しておらず若干のプラスと想定しています。見通しが弱いのは当社の供給先、ユーザー、機種種の兼ね合いです。

以上